

第1回教育振興基本計画検討委員会（9／24）の概要

委員 先ほど説明のあった、本日の資料の国の教育振興基本計画の概要、高知県の様々なデータ、論点案、県立大学の改革案等、また事前配布資料（「翔べ 土佐の子どもたち これからの高知の教育・その取組の方針」など）も踏まえ、皆さん方が考えている高知県の現状、教育の現状・問題点・課題、この計画の方向性も含めて、ご意見をいただきたい。

委員 中学の低学力の原因が分からない。この中学生が高校へ進学してどうなっているか、進学率が随分上がってきているということからすると、今、高校がどう変わってきているかについても知りたい。また、保護者・生徒の満足度調査では良い結果になっているが、なぜこんなに低学力かも疑問。

次に、生徒と教員が友達関係だと感じる。自分が学生の時はそうではなかったから、今のこういう関係・状態でいいのかと疑問に思う。

また、教員が今、どんなことに悩み、どんなことを生き甲斐にし、どんなことを仕事のやり甲斐にしているのかも知りたい。

委員 中学生の低い学力の原因について県教委の見解など、今の時点で言えることはあるか。

事務局 ひとつに、勉強時間が少ないこと。なぜ勉強時間が少ないか、例えば、宿題をどこまで出しているか、宿題チェックの有無、チェック方法等について調べ、そういうことができるよう取り組みを進めている。

高校については、センター試験を受けている生徒の点数は、民間データであるが中の上ぐらいだと聞いている。センター試験を受けていない生徒については、中学校の結果と同様なことが出ている。今後どうしていくのか課題意識をもって取り組む必要がある。

生徒と教員の友達関係については、子どもに寄り添うこと、子どもの目線あるいは子どもが主人公ということでやってきた結果、そういうこともあるのかなと感じて聞いた。

事務局 学力の問題については、家庭学習の時間が非常に少ないということが原因としてデータではっきり表れている。もうひとつは、学力向上のためのPDCAサイクルが学校の中に確立されていないのではないかとということ。学力調査の結果が良かった秋田県と比較をしたが、この点が弱いのではないかと思う。もちろん家庭学習も大きな要因である。

また、生徒と教員の関係については、社会環境の変化とともに、ご指摘のようなところが学校の中には存在すると感じる。ただ、家庭環境等が非常に厳しい生徒などもおり、心に寄り添う教育に、教員が熱心に取り組んでいる場合などは、そういう傾向もあるのではないかと思う。

委員 この問題も、この会全体を通じて、もう少し議論を深めていかなければいけない問題。

事務局 高校でも、いわゆる「二極化」の問題があり、例えば、負の計算が出来ない、アルファベットが書けないなど基礎学力がついてない生徒がたくさんいる。そういう生徒をどうフォローしていくかが課題。また、家庭での学習時間も、本県独自の調査結果から非常に少ないという結果が出ており、対応を考える必要がある。

生徒と教員の友達関係という状況は、高校にもある。ただ、高校に入ると、一定、教員と生徒で間を置こうとする場合も多く、「中学校では、子どもに近く、よく相談にのって相手もしてくれたけど、高校に入ると冷たい」という保護者からの指摘もある。

委員 今の問題（学力や生徒との関係など）は、大きな課題。今後議論していきたい。質問だが、家庭学習の時間について両課長から出たが、学校外での学習時間か、家庭学習か。

事務局 学校以外での勉強時間。

委員 家庭学習と言っても、自分でやる学習と、塾での学習がある。塾の問題をどう考えるのかが、小学校の学校外学習の問題とも関わっている。このことも議論しないといけない。

教員は今、どんなことで悩んでいるかという質問について、学校現場からの意見を。

委員 本校の昨年度の全国学力・学習状況調査（以下「学力調査」という）の結果は、県でも最低レベル。今年度は、高知県平均と全国平均との間で、全国より3～4ポイントの差で、昨年度より上がっている。授業は成立している学校であり、小学校の到達度把握検査の結果では、昨年度の生徒より、今年度の生徒が少し低い位置にあったため原因を調べると、昨年度は、学力調査に対する意識が教員含め学校として十分でなく、アンケートのような気持ちで受けさせていた。今年度は、その重要性を十分に認識させたことだけで結果に違いが出た。

本来、高知県の学力は、全国と3～4ポイントの差が本当じゃないかと思う。10ポイントの差が出るのは、授業が成立してないか、学力調査について生徒にきちんと受けさせているのかに原因があると思う。また、全国との3～4ポイントの差は、先ほどの家庭学習の差、教師の授業力の差がここに出ているのではないかと考える。

学校教育の担うべき役割は、学力形成と人間形成。生徒と教員と関係については、教員が何を思って人間形成しているのか、児童理解とは何かを考えるべきである。教員自身が修養的な指導ができているのか、仲の良いかたちで生徒を引き込んでいくことと、教員として指導をすることのさびわけが理解できてないこともある。

教員の悩みは、多忙感。例えば、極端な言い方をすると、家庭学習は家庭の問題だと思うが、そういう問題も含めて、教育と名のつくものは全て学校来る。

子どもたちの問題行動など人間形成の部分で気になる本来の問題もたくさんある。問題が整理できず、何から手をつけていいのかわからないような状況が学校内で生まれている。

委員 未だに、教育振興基本計画については、理解し難くよく分からない。何を切り口にどうしたらいいのか、こんなに広い範囲で何をまとめるのか迷っている。教育については、色々

答申が出されている。資料も揃っているのに、今さら何をしようというのか。学力低下や問題について、今までの研究されたことは何だったのか。この計画も同じ様な資料ができるだけではないのか。今までの失敗を分析して明らかにするべき。それをしないと横滑りする。問題を明らかにしてからきちんと行って欲しい。

今、学校において、競争心理、優劣をどのようにつけているのかを教えて欲しい。運動会ではみんな一等賞のイメージが強い。昔は、学力試験など、後ろの黒板に貼り出され、今度は勝つぞといういい意味での競争心をあおられていたと思う。

教員と生徒の関係については、保護者と教員の信頼関係ができ、子どもを任せようとなる。信頼関係をどういうかたちで表現するのか、はかれるものではないことにも原因があると思う。モンスターペアレントについても高知県にも存在するのか聞かせて欲しい。教員と保護者との信頼関係にも関係するし、保護者の教育の必要性にも関わってくる。

委員 モンスターペアレントに関連して高知県の実態をお願いしたい。

委員 「モンスターペアレント」という言葉で言われるが、保護者も子育てで大変悩んでいるということ。要は、学校と保護者の食い違いであり、子育てで悩んでいる保護者に対して、解決するような支援が十分でない学校がある。保護者の悩みを聞きながら語り合うことで、相反する関係ではなく、本当に大事な関係に変わる。

例えば、子どもが手をつないでもらえてない、友だち関係で辛い思いをしているのではないかと保護者が思う。教員は「そうじゃない。仲良くしている」と言ってるうちに溝ができ、学校の様子が見えない保護者は心配が膨らむ。先ほどの履歴書を親が持ってくるような大切に子育てをしている関係が割に家庭にあり、子供が心配なことを言うと「大変だ」となる。保護者も相談できる人がいないため、学校と良い関係ができてないと心配が膨らみ、様々なことが起る事がある。こういう場合、保護者に学校でできることは精いっぱいやるということを示して語り合っていけば解決する。本校は、大変落ち着いた学校だか、それでもそういうことが繰り返されている。それだけ保護者は子育てに悩んでいる。

委員 教育の様々な会に出席して、その先どうなるかを思うがあとが続かない。それでまた同じような会をするが、今回も同じようなことと正直感じる。

保護者としては、子育てを一生懸命やっているが、学校や教員とうまくかみ合わないことがある。私の場合、三世代同居で色々な知恵を学んだりしてきたが、今の親は、悩みを相談できるところがないため、どう向き合うかが分からない。県P連では「子供を変える必要はない。周りの大人が変わろう」と活動したが、食育にしても、家庭における親の役割などもうまく浸透しない。

今、高知県の家庭は、経済状況が良くないため、子どもたちと関わる時間より仕事を優先させなければならない状況にある。教育振興は親だけでも、行政だけでもできない。高知県の企業が、教育振興に対してどのような考えを持っているのか勉強していきたい。

子どもが大学卒業時に、県外企業を勧められた。最終的には高知県の企業を選んだが、高知県の企業が人材を確保していけない状況なども悩みとしてあるのかなと思う。工科大に進んだ子どもも、(就職について)県外も視野に入れるよう言われている。高知県に留ま

りたいと望んでも難しい。産業系の企業について、高知県ももっと何か考えなければならない。流出することだけを捉えるのではなく、留めさせるためには何が必要かも一緒に考えていきたい。

委員

人を変えるためには空気を変えるしかないと思う。県全体としての教育的な感覚、市町村として教育に対して意欲的に取組む感覚、学校が学びの場として成立させる空気、そういう意識があるのかを考えれば、改善すべき課題はたくさんあるのではないかと思う。また、課題解決のためには、教育関係だけでなく、企業、地域の力も含めて考える以外に空気を変える方法はない。

教員であれば、子どもたちをどう変え、学校をどう変えていくかという思いがあれば変わる。ただ、変えなくてもいいという意識の教員もいるため、その温度差が流れを生まない原因となる。

今、学校では、様々なものが学校に流れ込み、学校自体が必要なことを明確に整理ができてない。管理職が何から手をつけていいのか分からない。学校は、学力形成と人間形成の2つを柱に整理しないと大事な部分を忘れる。一度、教育をシンプルな部分に整理し、管理職を含めてリーダーになるべき人間がしっかりと抑え直すことが必要だと感じる。

委員

自分の子供が小学校の時は、1クラス27～28名、3年生からはずっと1クラスで、子どもは闘争心や人と競い合ういうことに欠けていた。少人数の学校では色々な弊害もあり、学力の差は大きかった。何が原因か考えた時、高学年になると「出来ることをしてきなさい」という宿題が多くなるため、自宅学習、自学自習が出来る子と出来ない子で差が出て、クラス中の学力の差が著しくなる。日々の宿題の大切さ、毎日の積み重ねの大切さを痛感した。また、夏休みの自由研究等も、親が熱心な子どもは立派なものを製作し、良い評価を得るが、ただ、子供が自発的にやっているものではないこともあった。長期休暇の宿題は、習熟できてないものを強化して習熟させたり、自分で考えてできることをさせる宿題がいいと思う。

また、成績の評価だが、低学年時は「よい」「わるい」「ふつう」の三段階の評価であった。「ふつう」というのは非常に幅が広いいうえ、親は「ふつう」であればいいと思うため、自分の子供がどの位置にいるかが分かるよう、もう少し数値化した方がいいと思う。

都会の子どもは最初から世界を見つめているが、高知や地方の子どもは、東京・大阪を目指している。最初から目指すところが違っていると県外の大学に行った子どもが言っていた。高知の子どもも世界に目を向けるような教育が大事だ。また、自発的に考える力、創造する力、ものをつくる力、自発的にできる力をつける教育を望む。

委員

中学時代から、約40数年卓球というスポーツに関わっている。生徒達と毎日関わっている中で気付いたことは、子どもの周りにいる大人が変わってきていること。

例えば、昔の保護者は「先生に子供を任せているから叱ってください。」とか、叱ると「叱られたうちの子が悪い」と言った。最近の保護者は「うちの子はどうして勝てないのか。」「うちの子は意地が悪くないから勝てないのか。」「もっとうちの子だけを強くして欲しい。」などと言う。また、試合の応援に来て、子どもの身の回りの世話をする。そして自分

の子供だけに差し入れをする。そして、そういう生徒達は、掃除がきちんとできない。自分のこともできず、物も大切にしない。親の影響かも知れないが生徒も少し変わってきている。

指導している中で全国大会ベスト8くらいなら、目標さえ立てて「絶対できる」と思って取り組めば、運動能力が低くても目標は達成できるが、それ以上を狙う場合は、自分のことは自分でできる、自己管理やルールを守ることができる子どもたちでないと難しいのではないか。

勉強においても、ある程度以上の点をとって世界に伸びていくためには、基礎的な自分の力を養っていないと難しいのではないか。それがどのようにしたら身につくのかと考えている。

私は学生の時に、卓球を好きにさせてもらった。私であれば体育の教員として、スポーツ（卓球）の魅力を知らせ、それを好きにさせること。勉強であれば教科を好きにさせる工夫をすることをアドバイスすることで、生徒を将来大きく伸ばせるのではないかと思う。

委員

ここ数年の就学前の基礎となる時期の子どもたちの様子を見て、子どもたちの中に何か有たずに大きくなっていると感じる。また、今の保護者は、豊かさや人としての豊かさを感じる価値観が少し違ってきているという思いがする。

今は、本来子どもが持っている探究心や不思議を追求していく力、試すこと、考えることが、あまり魅力的でなくなっている。その基になる原因はいろいろあるが、親子の愛着感が持てずそこで足踏みをしている子供もいる。遊びよりも大人に相手をしてもらいたい、甘えたい思いが強くて友達が目に入らないこともある。また、本来、失敗や試行錯誤を繰り返しながら充実感や達成感を得て、自尊心ややればできると実感していくのだが、そういう実体験をする前にテレビなどでもう結果が分かっているからしようとしなくてもある。友達とのかかわりにおいても、揉まれながら迷惑をかけたり、かけられたりする中で、人との付き合いや自分の気持ちを整理したり立て直すことを学んでいくが、そんな人とのつながりの実体験が少ないと、自分に折り合いがつけられなかったり、悪かったと素直に出せなかったりする。そして、一番大事な人とのつながりを持つことが難しいところもあり、その原因が親子の愛着感が非常に薄いことにあたりもする。例えば、テレビをつけて横で座って一緒にいてもお母さんは携帯電話でメールをしている。これは、親子で一緒に過ごすということではなく、子どもは聞いてもらいたい思いがあっても聞いてもらってなくて、聞いてもらった嬉しさを知らないから人に伝えようとしなくていい。

また、保護者が知らない、分からないことも多い。例えば、5月頃「勉強ができない」と1年生の保護者に相談された。聞くと、1年生になったら自分でできると思い、宿題も一人でさせていた。子どもは、どう宿題をしていけばいいのかわからなかっただけで、親子で一緒に勉強する習慣を身に付けるということを保護者自身も知らなかった。

園では、この親子で一緒に宿題や家庭学習の方法を身につけるための基礎となる部分について、親子で一緒に過ごすということはどういうことか、一緒に遊んで楽しかったことを親子で話し、感動を語り合うという時間は大切に、子供を伸ばすことになる伝えていく。

保育サービスが充実すると、保護者は働きやすく、預けやすい。そんな中で子どもたち

が置き去りにされないよう、親とつないでいく方法を園で模索している。

高知県の子どもに学力をつけ変えていくためには、幼稚園教員、保育士をどう変えていくか、その意識が変わらないと子供は変わらない。また、保護者をどう変え、地域をどう変えていくか、それを一緒に考えていきたい。

委員

この計画が10年後、長いスパンで考えることができるのは大変ありがたい。あまり慌てないで高知県の子供達を育てる道筋を考えたいものと、緊急に考えなければならないもの両方がある。

学力の低下ということについては、テストの点が悪いというだけでなく、生活力、ものの考え方、自分でできるかどうか、様々なものを含め、全体的に劣ってきている。

教員は、教科の学力をつけることに集中できればいいが、様々な課題が出てきているため、どこから手をつけたらいいか悩んでいる。ただこれは、学校内の課題を明確にして、学校づくりをしていけば解決することも多い。

中学校で学力が下がるのは、小学校で自学力がついてないことが大きいと思っている。小学校では教員が一人一人に対して細かく指導するため、中学校に入って「はい、どうぞ」と言われた時に自分でできない。複式学級で一番大事なのは、自分たちでできるという自学力。このかたちが、通常の学級でもできると自学力がつくが、大勢の子供がいる学級では、本読みでも一人に数分しかかけられない。活動時間を保障するには、教員が次々と発問をしながら授業をつくっていくが、教員の方が余計に手を出してしまうこともある。自学力をつけるような授業づくりに力を入れていかなければならないし、そのことが優れた授業づくりにもつながる。

また、高知県はとても素敵な県であるので、ふるさとを愛する気持ちを養うということが人間形成の一番の根源になると思う。都会とは違い、きれいな川や緑があり、温かい人やおせっかいなくらい歓迎してくれる人がいること。この人々や自然や社会と出会わせながら、ここに住んでよかったという土台を作って世界に羽ばたかせる、そういう方向性をもって育てていきたい。

委員

大学改革案については、話が突然出てきた内容も一部ある。

ある企業の社長から「工科大の学生は分数の足し算もできない。いいのがない」と言われた。一方、大学では、大企業に就職できている。原因を調べてみると、県外就職の内定日が、県内より2～3ヶ月早い。結局、元気な学生が県外へ出て行き、高知の企業に「工科大にいいのがない」と逆に言われる。ある県内企業に「学生を推薦させて欲しい」とお願いしたらすぐ決まった。大企業向けのアピール力はないけれども、じっくりできる学生を選んだという例もある。

モンスターペアレントということでは、筑波では高学歴の保護者が多く、教員に向かって「お前〇〇（大学名）か」と言ったりするから、教員にとってはモンスターペアレントばかりだっただろう。ただ、それがマイナスではなかった。色々な意味でお互いに刺激があったのではないかという気がする。

委員

学力向上の話だが、小6・中3の勉強は能力・資質を問われない、勉強努力だけを問わ

れる。学力向上のためには勉強努力は必要だが、勉強努力をするためには、学習意欲が必要で、その学習意欲が欠落しているということをデータで見せてもらった。この学習意欲が欠落している理由は何なのか。少なくとも人類学的な問題でも、地理学的な条件でもない。教員資質についても、小中学校の学問分野では教科指導力に甲乙つけられるほどのものはない。生活指導も高知県の教員は一生懸命やっている。あらゆる職種の中でも教員くらい一生懸命頑張っている職種はないと思う。そうすると、何なのか、行政はどうなのか。

文部省の時代から四半世紀以上にわたって「中学教育の障害弊害にならないよう高校入試はできるだけ日程を繰り下げなさい」と言われているが、高知県の高校入試は、前期試験で入学者の50%を確保する。通常の都道府県は3月中旬に50%確保が完了する。この試験日程は、全国47都道府県の中で、唯一、1月に50%を確保している県で第1位。早いところでも2月中旬。つまり、高知県の中学校生は、全国に比べて数ヶ月も前から、半分の子は合格、半分の子は不合格で、嫉妬、羨望、同情、不安も入り混じり、落ち着かず不安になり、教科指導に先生も専念できない状態が生まれる。高知県の高校入試の1月実施は、高知県の学力が全国最低レベルというデータよりもっとドラスティック。教育委員会の中で、中学校サイドで被害者意識はあるのか、高校サイドに加害者意識はあるのか。小中学校課と高等学校課の間で熾烈なやり取りがあった揚句のことなのか。何をもって1月なのか教えて欲しい。

委員 その問題は、県立高等学校教育問題検討委員会で答申を出した。近々変わってくるだろうと思う。

委員 自分は農業で、香美市小中学校学校評価委員もやっている。この8月、管理職も含めた教員から現場の話聞き、特別な支援が必要な児童生徒が増えていると聞いた。その子どもたちには細かな支援が必要だが他の子どももいる。学力向上と言われても多忙だ。解決策として、学力に向上に向けた教員を増やして欲しいと言う。現場を見たが、それが一番いいと感じた。また、小規模校を小中一貫校にしたら、校長が1人減る。その分加配の先生を増やしてくれたら、学力向上の授業もできるのではないかな。

また、特別な支援が必要な生徒が高校に進学した時、高校側にそういう知識をもった教員や対応がないことがあると、高校PTAをやっていると感じる。

新聞に学力向上と出ると県は学力向上しかやらないのかと保護者は思う。

学力向上、特別支援教育と合わせて、高校、中学校では職場体験や職場体験学習を増やせば、県内の就職率も上がると思う。

小学校、中学校、高校の1年生には、PTAや地域に理解のある教員をお願いしたい。体育会系や学力向上系のそればかりする教員が担当になると不登校の子が増えるように思う。

委員 ワーストばかり資料として並んだが、良いことの資料はないのか。高知県の子供はこんなところが良いという資料を探し出して欲しい。

また、体力、学力は低いというデータは見事に出たが、これが生きる力とどういう関係にあるのか、人間としての値打ちとどういう関係があるのか、そこも話をして欲しい。

軽度発達障害の子どもたちについても、論議をお願いしたい。土佐の教育改革で特別支援教育は、かなり進歩したと思っている。ただ、網をいくら小さくしてもこぼれていく特別な支援の必要な子どもたちがいることを確認していきたいと思う。

実務面でいうと、秋田県は数年前は学力の高い県ではなかったが、秋田県が伸びたことについての分析はしているのか。また、県内でも学力テストの高いところと低いところ、地域性なども含めた解析も必要ではないか。

よき高知県人を育てることが、この会の一番の中心だと思うが、高校まで育て、県外へ行く。良き日本人はできるが、それでは高知県は結局貧乏県になる。産業振興計画との絡みもあるだろうし、高知県という枠にとらわれずに日本人を育てる、世界人を育てるといふグローバルな視点で見るのか、そこをどう考えるか。

委員

ずっと考えていることは、わからないことがわかるようになる、できなかったことができるようになる、こんな素晴らしいことはない。人間にとって学ぶということは、本当に楽しいことなのに、どこのボタンを掛け違ったのかと考えさせられる。私の目標は、10年後学ぶことの楽しさを共有する教育的風土を高知県に作っていくこと。学ぶことは楽しいという高知県にどうやったらなるのかを願い、考えている。ミニマムスタンダードという言葉は、基礎基本という意味。高知県の教員や皆さんは、何故、基礎基本を徹底的にやらないのか、こんなに苦手なのかと思う。皆で力を合わせたらできるのに、その力をどうしたら合わせる事ができるか。組織的なことへの課題を考えている。

委員

それぞれの事例を大変興味深く聞き、資料もとても参考になった。

高知県の特に中学の学力実態が低位にあるということについては、きちんと原因分析をすべきだと思う。一方で、教師一人あたりの生徒数、一学級あたりの生徒数は一番少ない。それだけ手がかかっているのに学力が低いということの分析を、自然の環境や産業の状況、行政や学校現場の問題など、改善するヒントが見えるようなかたちで原因分析をして欲しい。

国の基本計画は、全体的に網羅しないといけないので抽象的にならざるを得ない。地方の時代なので、高知県の計画には、目標などは抽象的な表現ではなく、はっきり打ち出すの良いがと思う。例えば、高知県内で就職できる子は、県内で就職できるような力をつける。外に出て行くのであれば、都会でフリーターにならないような力をつける。今は不透明な時代であるから、外に出ていくだけの一人前にする力をつけることは大切だと思う。

また、基本計画の方法論としては、できるだけ具体的に、皆で力を合わせればできるものを提示できるといい。「早寝早起き朝ごはん」がこんなふうに広がったのは、わかりやすいからだと思う。少し努力すれば皆で頑張れるような方法論を考えると良いと思う。

委員

学校教育の問題、家庭教育の問題、社会の教育力の問題を含めて、全国に共通する問題もあると思うが、高知県の教育振興基本計画を作るということで、ダメなところだけでなく、伸ばすべきところも含めて議論を進めたいと思う。